令和 3 年 12 月 15 日

学位請求論文（課程博士）審査報告

学位請求論文：　芥川龍之介――訪中前後の中国人女性の表象

学位請求者　：　文学研究科博士課程日本語日本文学専攻

車　花子

審査委員

主査　文学部教授　　髙橋　龍夫　㊞

副査　文学部教授　　山口　政幸　㊞

副査　文学部教授　　米村みゆき　㊞

審査報告

本論は、日本近代文学の代表的作家、芥川龍之介の作品について、特に中国を舞台としたり主人公が中国女性である諸作品を取り上げ、作品における中国人女性がどのように表象され、その表象がどのような推移を辿ったかを分析したものである。主な対象作品は、「女体」(『帝国文学』1917・10)、「南京の基督」(『中央公論』1920・7)、「奇怪な再会」(『大阪毎日新聞』夕刊　1921・1・5～2・2)、「湖南の扇」(『中央公論』1926・1)、及び中国訪問後に発表した一連のルポルタージュを一冊にまとめた『支那游記』(改造社 1925・11）である。21 世紀に入り、芥川龍之介の中国関連作品については、日本、及び東アジアの日本近代文学研究者によって大きく読み替えがなされてきている。近年の論の多くは、1910～20 年代の国際事情を背景にした中国と日本との政治的・社会的観点から、芥川龍之介の作品中にみられる社会意識や時事的な批評性を評価するものとなっている。本論もそうした最新の研究成果を踏まえながら、各作品を各章に分けて丹念に分析す

ることから着手している。その上で、新たな視点として、諸作品に登場する中国人女性の人物設定や行動、人間関係など具体的な描写に着目し、芥川の文学作品において中国人女性がどのように表象されているかの検討を通して、当時の日本側の中国表象に潜在するコロニアル的な意識やジェンダー的課題等を炙り出すことに力点を置くことで、従来とは異なった観点からの作品評価を実現している。また、そうした女性表象という観点を通して、作家としての芥川龍之介における創作意識の内実に光を当て、創作の基点となる作家自身の個人的事情に影響された女性観の形成プロセスやその変化を捉えることで、芥川の伝記的事実に還元する従来の作家論では見落とされてきた、作家の内奥に潜む現実的・及び理想的女性に対する審美眼や感性と、それに基づく心情的機微や感覚的把握を作家としての評価の一要素に導いたことは、本論の大きな成果といえる。

芥川龍之介文学の研究は、テキストを対象とした出典検証、創作方法の考察、構造分析、同時代の歴史的評価、メディアや文化との関係性など、様々な側面から精緻に展開しており、また、作家を対象とした原稿の確認や評伝的検証などの研究も進んでいる。しかしながら、芥川龍之介という生身の作家の執筆過程における経験や体験、心情、思考といった内面的な営為に光を当てながら、作品の着想や創作の契機や意識といった作品生成時の創作過程を考察する論は、実はあまり手を付けられていない。その理由として、具体的な検証が難しいこと、作家の実人生の軌跡をトレースするだけの素朴な論に帰着してしまうことなどの危惧があるからだが、本論は、一連の中国女性を表象した作品群を連作として捉え、その作品分析を踏まえながら、そこに作者の実体験が着想の段階からどのように潜在しているかという方法をとることで、芥川の私小説的要素を剔出しながら、芥川の人間的な側面について創作を通して改めて見出した好論といえる。

ただし、そうした方法の限界として作品分析における検証手続きの不備が散見され、論証の難しいアプローチであることも見受けられた。また、諸作品を通した女性像の変遷については、同時代の他の作家の作品群にも目配りすることで時代特有の捉え方と、芥川固有の捉え方との比較が導き出せるはずであり、より客観性を担保することが可能であった。さらには、東アジア圏における文学研究者の成果を取り入れることで、近年の研究動向をより総体的に目配りできたはずである。一方、1920 年代前後において、日本の作家が作中に中国女性を主人公として登場させること自体、当時の日本においては政治性を帯びることを意識する必要もあった。こうした課題は今後の成果として期待したい。

以上のことより、審査の結果、博士の学位を授与するに値する論文と判定する。